

編集後記

今夏の日本は、地球温暖化が原因と見られる異常気象による豪雨災害や予防ワクチンのない感染症が起り、古代的な自然への畏敬の念を抱きつつ、現代的な科学技術を駆使すべき必要性を考えさせられました。

いずれも自然に対する人間の存在や営為が招いた危機ではないかと懸念する識者も多く、言語と道具を操る万物の霊長などと傲岸不遜な態度で自然に臨む人間こそが世界の問題だとする主旨の論調も目立ちました。

このような時代や環境の状況を踏まえ、人間の多様性と可能性、身体性と精神性を研究する科学が人間科学だと考えつつ、『人間科学研究』第8巻第1号をお届けします。

今号は、こども学科7件、スポーツ学科4件、教養教育部5件、合計16件の投稿がありました。創刊号13件を上回る過去最高のボリュームとなりました。中身の方も表紙の論題のとおり、バラエティーに富んだ内容となっております。教養教育部からの投稿については、人文科学系統の論題を採択して掲載しました。

『平成25年度 文部科学白書(概要)』(平成26年6月 文部科学省)を閲覧すると、2020年開催の東京オリンピック・パラリンピックに向けて「スポーツ立国の実現」「文化芸術立国の実現」「グローバル人材の育成」「日本発イノベーションの加速・発信」等のスローガンが掲げられていますが、期せずして本号の論題がこれらのいずれかに対応しているのは、学部の特長もさることながら、執筆者が世界や社会の動向に敏感であり、現実感を持って真摯に各自の課題と取り組んでいるからだと思います。そのフィールドは、地域から世界にまで及び、国境を越えた地球規模の視野と、草の根の地域の視点で、さまざまな問題を捉えていこうとするグローカリズムの様相を呈しています。これらの活動が少しでも評価され、何かしら世の中のお役に立てば幸いです。

どうぞ高覧ご批評くださいますよう、宜しく願い申し上げます。

2014年9月吉日

編集委員長 馬場 治

《投稿された論文等に関する著作権は基本的に人間科学部に帰属します》